



TITLE:

ベトナム語の指示詞に関する諸問題—理論と記述—(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

NGUYEN, THI HA THUY

---

CITATION:

NGUYEN, THI HA THUY. ベトナム語の指示詞に関する諸問題—理論と記述—. 京都大学, 2020, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2020-07-27

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22679>

RIGHT:

京都大学	博士（文学）	氏名	NGUYEN THI HA THUY
論文題目	ベトナム語の指示詞に関する諸問題 ―理論と記述―		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>ベトナム語には三系列の指示詞があり、指示詞の単独形や名詞修飾形から転用した文末詞が存在している。これらの指示詞・文末詞を主なテーマとする研究は少なく、用法の記述にとどまるものがほとんどである。指示詞に関しては、話し手・聞き手という談話的・語用論的な概念に言及する研究が多く、指示詞の用法を距離区分または人称区分による眼前指示用法（現場指示用法／直示用法／独立的用法とも）と、話し手と聞き手との共有知識による非眼前指示用法（文脈指示用法／非直示用法／照応的用法とも）といった二つの用法を別々の原理で記述するのが一般的である。また、指示詞から転用した文末詞に関しては、先行研究では、他の典型的な文末詞と同様に、モダリティを表す表現として扱われており、同形の指示詞との関連性について言及する研究はほとんど見られない。本論文は、ベトナム語と同じく三系列の指示詞を持つ日本語や韓国語をも取り上げて対照言語学的な考察を行い、上述の指示詞の二つの用法を一つの枠組みに基づいて統一的に記述する試みである。さらに、そこから得られたベトナム語の指示詞の一般化に基づき、指示詞の諸用法と指示詞から転用した文末詞の用法との関連性について論じるものである。</p> <p>本論文は、全7章からなる。第1章では、本論文で扱う指示詞の分類、研究の方向性と構成について述べる。第2章では、三系列の指示詞の機能的対立について、日本語の指示詞についての意味論・統語論的研究である Hoji et al. (2003)、田窪（2008など）と同様に捉えた上で、ベトナム語の指示詞を特徴付ける[±現場]（[±spatial]）という素性を提案する。[±現場]とは、認知主体である話し手と指示対象との距離的・知覚的な関係に基づく指示詞を特徴付ける素性である。発話現場に存在している、または視覚的に確認できなくても発話現場に存在しているとみなされる対象を指す指示詞は[+現場]の特徴を持つ。発話現場に存在しているとみなされない対象を指す指示詞は[-現場]の特徴を持つ。[+現場]のものにのみ「近・遠」という距離区分があるのに対し、[-現場]のものには距離区分がないことになる。三系列の指示詞を持つベトナム語では、[+現場]の特徴を持つのは近称の <i>dây</i> 系と遠称の <i>kia</i> 系である。[-現場]の特徴を持つのは <i>dãy</i> (<i>dó</i>) 系であることを、第2章で提案している。</p> <p>続く第3章で論者は、これまでのベトナム語の指示詞についての先行研究において、指示詞の用法が距離区分または人称区分による眼前指示用法と、話し手と聞き手との共有知識による非眼前指示用法が、別々の原理で記述されていることを問題として指摘する。この問題を解決するために、指示詞を眼前指示と非眼前指示に分けて、その用法を整理し、ベトナム語の指示詞が、大きくは、近称・遠称の <i>dây-kia</i> が共通の振</p>			

る舞いをもち、それらが中称の *đây*(*đó*) と対立をなしていることを示す。その上で、第2章で提案した意味論・語用論の素性である[±現場]による統一的な解釈を行う。その結果は次の通りである。*đây-kia* は[+現場]の特徴を持っているのに対し、*đây*(*đó*) は[-現場]の特徴を持っている。*đây-kia* は距離「近・遠」により区別されるが、*đây*(*đó*) には距離区分がない。また、「近・遠」と[±現場]は語用論的性質で独立しているが、「近」と「遠」は[+現場]しか取れず、[+現場]の特徴を持つ *đây* と *kia* は基本的に現場指示用法にしか用いられない。「近・遠」の距離区分がない[-現場]の特徴を持つ *đây*(*đó*) は基本的に非現場指示用法にしか用いられない。[+現場]の *đây* と *kia* は現場指示用法を、[-現場]の *đây*(*đó*) が非現場指示用法を、それぞれ基本用法としているわけである。拡張用法として非現場指示用法に用いられる *đây-kia*、または現場指示用法に用いられる *đây*(*đó*) も存在している。ただし、非現場指示用法に用いられる *đây* と *kia* は、基本用法である現場指示用法における「近・遠」の特徴を保持している。一方、拡張用法として現場指示用法に用いられる *đây*(*đó*) は、[-現場]の特徴を依然として維持している。

第4章では、第2章で提案した指示詞の特徴付けである[±現場]をベトナム語の様態・性質の指示詞にも応用し、同じ分析が妥当であるか、検証する。様態・性質の指示詞も空間指示用法に用いられる指示詞と同様に、*thế này-thế-thế kia* (近称・中称・遠称) の三系列を持つ。指示詞の一種としての *thế này-thế-thế kia* にも指示対象に該当するものが存在しており、「指す」機能を持つ。様態・性質の指示詞は、「指す」のみならず「表す」機能をあわせ持つのが特徴的である。論者の考えによると、「指す」機能の対象になるのは動作・作用の主体自体、または性質・性状が形容されるもの自体であり、空間の指示詞が指し示す対象とは異なる。[+現場]の特徴を持つ *thế này* と *thế kia* は、話し手(認知主体)にとって「近」または「遠」であるとみなされる対象を指示するという典型的な現場指示用法を持つ。ただし、空間指示の *đây-kia* とは異なり、*thế này* と *thế kia* は基本的に非現場指示用法には用いられない。一方、[-現場]の特徴を持つ *thế* は現場に存在しているとみなされない、あるいは話し手の記憶にある対象を指し示すという典型的な非現場指示用法を持つ。すなわち、空間指示に使われる中称の指示詞と同様に、対象が現場になれば全て *thế* で指示することができる。拡張用法として現場指示用法に用いられる *thế* は、一度言及されたものや、動作主体である聞き手(=指示対象)あるいは聞き手に近い(または属する)といった「聞き手の領域」にあるものを指示する。いずれにせよ、[-現場]の特徴を依然として維持している。また、統語的には、中称の *thế* は前方照応用法を持ち、対話における先行発話にある句・節、あるいは発話全体をうけることができる。近称の *thế này* と遠称の *thế kia* にはこのような用法がない。

第5章では、空間の指示詞の派生的用法であると考えられる指示詞による時間指示の

機能について議論する。ベトナム語の指示詞における時間指示は、基本的に近称の *đây/này/này* と遠称の *kia/kia* は発話時を参照点とする時間を指示する直示的指示であるのに対し、中称の *đấy(đó)* は発話時を参照点としない時間を指示する非直示的指示である。論者はこの点において、時間指示が空間指示と関連性を有すると考える。[+現場]の特徴を持つ近称と遠称の指示詞は、空間指示では発話現場に存在しているまたは視覚的に確認できなくても発話現場に存在しているとみなされる対象を指すという現場指示用法に用いられ、話し手と指示対象との距離に基づく「近・遠」という（物理的・心理的な）距離区分によって区別される。時間指示では、発話時を参照点とする時間を指示する直示的用法に用いられ、近称は発話時から近い過去を、遠称は発話時から遠い過去や将来を表し、発話時から「近」いか「遠」いかで区別される。一方、[-現場]の特徴を持つ中称の指示詞は、空間指示では発話現場に存在しているとみなされない対象を指すという非現場指示用法に用いられ、時間指示では発話時間を参照点としない時間を指示するという非直示的指示に用いられる。このように、本論文がここまで提唱してきた一般化に従って、空間指示及び時間指示の用法の平行性を捉える。

第6章では、指示詞から転用した文末詞 (*đây/này-đấy/ấy-kia(cơ)/kia*) の用法を記述し、元の指示詞の用法との関連性についての主張を展開している。まず、品詞論とモダリティ論から見た、*đây/này-đấy/ấy-kia(cơ)/kia* を含むいわゆる文末詞の位置付けについて論じる。本論文で扱われる文末詞とは、統語的には助詞の一種であり、文末に置かれるものである。また、機能的にはモダリティ表現であり、表現類型のモダリティと伝達のモダリティを表す品詞である。そのうち、*đây/này-đấy/ấy-kia(cơ)/kia* は伝達のモダリティを表すものである。論者は、これまでの先行研究とは異なったアプローチを採用し、ベトナム語における文の表現類型を確認した上で、それらに対する文末詞としての *đây/này-đấy/ấy-kia(cơ)/kia* の用法を考察する。その結果、平叙文では、近称の *đây/này* はどちらも発話現場にあるまたは恰も発話現場にあるかのようなもの・動作に対する聞き手への注意喚起を表すことが示される。*Đây* は平叙文において、発話場で発話時に得られたばかりの情報に基づく話し手の判断を表すこともある。一方、中称の *đấy/ấy(y)* は、話し手が物事を新しい情報として聞き手に提示する時に用いられる、あるいは聞き手または話題の人物や内容への評価を表したりする。遠称では、*kia(cơ)* は、話し手が聞き手の想定している情報と異なる情報を提示する場合に用いられたり、話し手の評価を表したりする。*kia* は発話現場にある遠くに離れた可視的なもの・動作に対する聞き手への注意喚起を表す。疑問文と共起する近称の *đây* は聞き手にその場で直ちに返答をするように催促する時に用いられるが、独り言の場合は話し手の不安・ためらいの気持ちといった話し手の態度を表す。中称の *đấy/ấy(y)* は、疑問文では、聞き手に関する情報提示の要求を表す。遠称

の *kia*(co) は、聞き手に対してより詳細な情報を補充するように求める場合に用いられる。命令文では、近称の *dây/nây* は話し手が聞き手に対してその場ですぐは何らかの動作を行うように要求する時に使用される。中称の *dãy/ãy(y)* は、聞き手に対する軽い命令や注意を表す。遠称の *kia* は、聞き手に対するその場での行動実行を催促する時に用いられる。これをふまえ、指示詞から転用した文末詞と元の指示詞の用法との関連性については、[+現場]の特徴を持つ近称及び一部の遠称は、文末詞として機能する時においても、基本的に指示詞の性質を維持していることが論じられる。それに対し、[-現場]の特徴を持つ中称及び一部の遠称は、指示詞の性質を維持しておらず、典型的な文末詞として機能していることが示される。

第7章では、本論文で述べてきたベトナム語の指示詞とその関連用法の一般化について、主張をまとめた上で、これまでの先行研究で行われてきた記述との違いを示している。まず、本論文で提唱する[±現場]という意味論・語用論的素性を使用することにより明らかになった、ベトナム語の指示詞の特徴をまとめている。先行研究に言及されていない中称・遠称の使い分けを明示する用法、様態・性質の指示詞としての用法、時間表現の分類に基づいた指示詞の時間指示用法、モダリティ論・品詞論から見た表現類型のモダリティと伝達のモダリティを表す指示詞の文末詞としての用法の記述も行っており、ベトナム語における指示詞連語彙を包括的かつ統一的に記述し、理論化できたとする。また、本研究で扱えなかった今後の課題について述べる。なお、付録では、ベトナム語における表現・伝達的な機能による文の表現類型とその統語的特徴を確認し、これまでの先行研究とは異なる表現類型の下位分類を試みる。さらに、これらの表現類型との関係によって、指示詞から転用したものを含むベトナム語の文末詞全体の統語的特徴をまとめる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はベトナム語の指示詞の多様な用法と指示詞に由来する文末詞の用法を記述し、それらの用法を体系的に分析する試みである。論者は、ベトナム語の指示詞に関わる、これまでに見逃されてきた言語事実を掘り起こしながら、ベトナム語と同じく三系列の指示詞を持つ日本語や韓国語をも取り上げて対照言語学的な考察を行い、指示詞の諸用法に一貫した原理を見出し、統一的に記述しようと試みる。さらに、指示詞から転用された文末詞の用法には、指示詞の特徴を失った部分があるものの、指示詞の使い分けの原理に平行するところも多いことを指摘する。

本論文は、全7章からなる。第1章では、本論文で扱う指示詞の分類、研究の方向性と構成について述べる。第2章では、ベトナム語の三系列の指示詞の機能的対立について、日本語の指示詞についての意味論・統語論的研究である Hoji et al. (2003)、田窪 (2008など) の分析と同様に捉えられると仮定する。ただしベトナム語の指示詞は、日本語の指示詞とは重要な違いがあると、論者は指摘する。ベトナム語と韓国語の場合、指示対象が発話現場に存在するかいなか問題になることを示す事実があり、日本語のように、先行詞の必要性という特徴付けによって適切な分類をすることが不可能であるためである。そのため、論者はベトナム語と韓国語の指示詞を特徴付ける[±現場]([±spatial])という素性を提案する。[±現場]とは、認知主体である話し手と指示対象との距離的・知覚的な関係に基づく、指示詞を特徴付ける素性である。

続く第3章で、論者は指示詞の用法を眼前指示と非眼前指示に分けて、詳細な振る舞いを整理し、ベトナム語の指示詞においては、近称・遠称が共通の振る舞いをもち、それらが中称と対立をなしていることを示す。その上で、指示詞の持つ素性である[±現場]と指示詞の用法との関係について、統一的な解釈を行う。まず、「近・遠」と[±現場]は語用論的性質で独立しているものの、基本用法においては「近」と「遠」は[+現場]しか取れないという関係があることを示す。次に、拡張用法として非現場指示用法に用いられる近称・遠称、または現場指示用法に用いられる中称も存在するものの、非現場指示用法に用いられる近称と遠称は、基本用法である現場指示用法における「近・遠」の特徴を保持していることを例証する。最後に、拡張用法として現場指示用法に用いられる中称も、[-現場]の特徴を依然として維持していることを示す。

第4章で、論者は[±現場]という素性をベトナム語の様態・性質の指示詞にも適用することの妥当性を検証する。様態・性質の指示詞も空間指示用法に用いられる指示詞と同様に、近称・中称・遠称の三系列を持つ。様態・性質の指示詞は、「指す」のみならず「表す」機能をあわせ持つのが特徴的であるが、これらに対する指示対象に該当するものが存在する。論者は「指す」機能の対象になるのは動作・作用の主体自体、または性質・性状が形容されるもの自体であり、空間の指示詞が指し示す対象と

は異なると考える。[+現場]の特徴を持つ近称と遠称は、話し手（認知主体）にとって「近」または「遠」であるとみなされる対象を指示するという典型的な現場指示用法を持つ。ただし、空間指示の近称・遠称とは異なり、様態・性質の近称・遠称は基本的に非現場指示用法には用いられない。統語的には、様態・性質の中称は前方照応用法を持ち、対話における先行発話にある句・節、あるいは発話全体をうけることができる点が特異である。

第5章では、空間の指示詞の派生的用法であると考えられる指示詞による時間指示の機能について議論する。ベトナム語の指示詞における時間指示は、基本的に近称と遠称は、発話時を参照点とする時間を指示する直示的指示であるのに対し、中称は非直示的指示である。論者はこの点において、時間指示が空間指示と関連性を有すると考える。

第6章では、指示詞から転用した文末詞の用法を記述し、元の指示詞の用法との関連についての主張を展開している。まず、品詞論とモダリティ論から見た、これらの文末詞の位置付けについて論じる。次に、論者はベトナム語における文の表現類型を確認した上で、それらに対する文末詞としての指示詞由来形式の用法を考察する。平叙文、疑問文、独り言、命令文などに分けて詳細な記述を行っている。この記述に基づき、指示詞と指示詞から転用された文末詞との関連性について、論者は、中称及び一部の遠称は、指示詞の性質を維持しておらず、典型的な文末詞として機能しているが、近称及び一部の遠称は、文末詞として機能する時においても、基本的に指示詞の性質を維持していることを論じる。

第7章は記述と主張をまとめ、先行研究の記述・解釈との違いを示し、今後の課題について述べている。

本論文の分析、議論に問題点が残されていることも事実である。問題は主に、論者が自身の研究の価値を一部見誤っていることにある。分析において素性の役割を過剰に重視していること、発話参加者と用法の関係を過小に見積もっていること、指示副詞の「指示過程」として示された実証的とはいえない理論装置などには今後再検討が必要になろう。指示詞由来の間投詞について論が及ばなかったことも惜まれる。しかし、これらの問題点が読者に了解されるとすれば、それは取りも直さず、論者が誠実にベトナム語指示詞に関する言語事実を示したことによるものである。詳細に亘る記述を行い、一貫した観点から分析を試みる本論文は、ベトナム語指示詞に関する議論を深める際に、今後、参照が必須になるであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年5月1日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。